物語文の表現と文末形式

――芥川作品を通して――（下）

藤井俊博

四・一　四作品に見られる文末形式

ここではまず、表1～表4（前号掲載）の四作品を合わせて、表現内容毎にどのような文末形式が用いられているかを整理しておく。次に、過去形と現在形に大きく分けて次に示す。

Ⅰ　→過去形＝「た」（「てしまった」「しまった」「はじめた」「ようとした」）

ⅡA→現在形＝「る」（動詞終止形）

ⅡB→過去形＝「あった」「いた」「いたのである」「た」「たのである」「たのであろう」「たのであった」「てあった」「であった」「であったのである」「である」「ていた」「ていたのである」「ているのであった」「てしまったのである」「ているばかりであった」「でなかった」「ないのであった」「なかった」「なくなった」「のであった」

現在形＝「からである」「である」「であろう」「ている」「ているのである」「でない」「ない」「ないのである」「のである」「のでない」「る」（動詞現在形）

ⅢC→過去形＝「た」「ていた」

現在形＝「ている」「ない」「らしい」「る」（動詞現在形）

ⅢD→過去形＝「あった」「た」「ちがいなかった」「であった」「ていた」「てしまった」「なかった」「のであった」「ようであった」「らしかった」

現在形＝「ちがいない」「であろう」「ない」「らしい」

Ⅳ　→「会話文」「手紙」「歌」

Ⅰは過去形のみ、ⅡAは現在形のみであるが、ⅡBとⅢCⅢDで

は、それぞれ過去形と現在形の両方が見られる。ⅡⅢⅣでは過去形と現在形というほかに、文末形式の傾向として次のような点が指摘できる。すなわち、ⅡBでは、過去形と現在形とにおいて共通する文末形式の要素として、

（状態）継続状態「～ている」「～てある」・否定的状態「～ない」

（解説）肯定判断「～である」・背景説明「のである」・否定判断「でない」

を挙げることができる。これらの「状態」「解説」の表現内容を基軸としながら、他の表現形式は、

「ている」＋「のである」→「ているのである」

「ている」＋「のであった」→「ているのであった」

「ない」＋「のである」→「ないのである」

「ていた」＋「のである」→「ていたのである」

「であった」＋「のである」→「であったのである」

のように、これら「状態」「解説」の形式と「た」を組み合わせた文末形式バリエーションが出来ていると言ってよい。ⅡBは表全体の比率でもⅠの「た」と並んで多く、物語の叙述の基軸となっていることが分かる。

ⅢC・ⅢDにおいても、「羅生門」では「た」「たのである」「ていた」「ていたのである」「ているのである」「ない」などが見られⅡBと同様の文末形式が多い。他の作品も見渡すと、これらは、「ていた」と「ている」（ⅢC）、「ちがいない」と「ちがいなかった」（ⅢD）、「らしい」と「らしかった」（ⅢD）などの過去形と現在形と両方が見られるものある。ⅢCでも、「ていた」の形式を採る場合は、ⅡBに連続する内容が含まれていることになるが、上接する動詞の性質が視覚・聴覚に関わることによってⅢCとして扱った。このようにⅠ～Ⅳの要素は実際は複合的に現れることが多いと言える。次に例を挙げてこの点を確認しておく。

○下人は七段ある石段の一番上の段に、洗ひざらした紺の襖（あお）の尻を据ゑて、右の頬に出来た、大きな面皰（にきび）を気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めてゐた。

○そこで、下人は、何をおいても差当り明日（あす）の暮しをどうにかしようとして――云はゞどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考へをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いてゐたのである。

右の例は、「気にしながら」「ぼんやり」、「考へをたどりながら」「聞くともなく」など下人の心理を描いたⅢDの表現が含まれ、これにⅢCの「眺めてゐた」「聞いてゐたのである」の語句が続いている。さらに、「ていた」「のである」によって下人のおかれた状況

の解説になっている点から言えば、ⅡBの側面も持った文である。工藤真由美は、描出話法が過去形を採った場合は、人物の内的視点と語り手の外的視点が「二重視点化」したものだと述べているが、これは筆者の分類で言えばⅠとⅢCの複合であると言える。しかし、右の第一例のように「ていた」が続く場合は、Ⅰの場合のような「た」の場面を進める機能は弱くなり、ⅡBの側面が強くなるのである。

ⅢDは、地の文に人物の心情が共有的に描かれる場合で「ちがいない」「らしい」「である」「でない」などの判断を含むものである。「羅生門」では「らしい」「であろう」を用いた次のような例が典型例として見られるが、この場合でも、文中に他の要素として「見ると」というⅢCの内容を含んでいる。

○それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を其処此処と動かしてゐるらしい。

○髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

また、「たのであろう」も心情の直接的表現であるが、

○髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であらう。

○この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へてゐた、饑死(うえじに)をするか盗人(ぬすびと)になるかと云ふ問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、饑死を選んだ事であらう。

○すると、その気色(けしき)が、先方へも通じたのであらう。

のような三例を比べると、第一例は、「見ると」と呼応して用いていることから人物視点からのⅢDの例であると見られるが、後の二例は語り手による推量であり、ⅡBとして扱うことができる。

以上のように、文末形式に現れた表現内容によって分類したが、その一文の内容にはⅠ・ⅡB・ⅢC・ⅢDの要素が入り交じって現れる場合が多い。ここでは、文末の動詞に「聴覚・視覚」「感覚・思考」を用いたものをⅢC・ⅢDと分類しておいたのであるが、特にⅡBに多い文末形式を伴う場合が多いことに注意したい。

四・二　動詞の意味との関わり

次に、「羅生門」を例として、Ⅰ～Ⅲの述語部分にどのような意味内容の動詞が用いられているかという観点から見ておきたい。

〈1〉Ⅰの観察

次にⅠに上接して用いられた動詞を挙げる。括弧内の数字は用例数である。

集まって来る（1）、歩みよる（1）、云う（4）、行く（1）、動かす（1）、掩う（1）、かけ下りる（1）、蹴倒す（1）、立ち上がる（1）、つかみ合う（1）、つきつける（1）、飛び上

がる（2）、抜きはじめる（1）、ねじ倒す（1）、念を押す（1）、罵る（1）、上りつめる（1）、剥ぎとる（1）、這って行く（1）、暇を出される（1）、ふみかける（1）、逢着する（1）

永尾章曹は、「た」で終わる文で、話の筋を示す文においては、「発言語彙」が何度も用いられやすいことを指摘している。「羅生門」においても「云う」の他、「念を押す」「罵る」などが見られ、広く見れば「暇を出される」なども類例と言えよう。その他の動詞は、概ね、他の物体に対して物理的に働きかける意味の他動詞（動かす、掩う、蹴倒す、冷ます、つかみ合う、つきつける、抜きはじめる、ねじ倒す、剥ぎとる、ふみかける）と、移動を表す動詞（集まってくる、歩みよる、行く、かけ下りる、立ち上がる、飛び上がる、上りつめる、這って行く、逢着する）に大別でき、Ｉほとんどこれらによって占められていると言える。このように、物語の文章は、人物の発言、移動、働きかけなどを表す語句に「た」が付属する表現によって、物語の時間を進行させ、話の筋を進めていると言えよう。このようなＩの文を辿れば、話の大筋が分かるのである。次に「羅生門」の冒頭を挙げる（頭の括弧は分類、尾の括弧は通し番号）が、ⅡＢの文が14文続いた後に、Ｉの文が現れる。

（ⅡＢ）ある日の暮方の事である。（1）

（ⅡＢ）一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。（2）

（ⅡＢ）広い門の下には、この男の外に誰もゐない。（3）

（ⅡＢ）唯、所々丹塗の剥げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまつてゐる。（4）

（ⅡＢ）羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありさうなものである。（5）

（ⅡＢ）それが、この男の外には誰もゐない。（6）

（ⅡＢ）何故かと云ふと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云ふ災がつゞいて起つた。（7）

（ⅡＢ）そこで洛中のさびれ方は一通りではない。（8）

（ⅡＢ）旧記によると、仏像や仏具を打砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に売つてゐたと云ふ事である。（9）

（ⅡＢ）洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨て、顧る者がなかつた。（10）

（ⅡＢ）するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。（11）

（ⅡB）盗人が棲む。（12）

（ⅡB）とうとうしまひには、引取り手のない死人を、この門へ持つて来て、棄て、行くと云ふ習慣さえ出来た。（13）

（ⅡB）そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがつて、この門の近所へは足ぶみをしない事になつてしまつたのである。（14）

（Ⅰ）その代り又鴉がどこからか、たくさん集つて来た。（15）

1文～14文は、「ある日の暮れ方」に「雨やみを待」つ下人について、1文目から6行目までは下人の他には人がいない状況を描写し、7文目から14文目までは人がいない理由を解説している。これらは大部分、「ていた」（2）「ている」（4）「である」（1・5・9）「のである」（14）「でない」（8）「ない」（3・6）「なかった」（10）のようにⅡBに特徴的な文末形式に依っているが、7文目・13文目の「起つた」「出来た」のようなⅠに特徴的な過去形の文末形式や、11文目・12文目の「狐狸が棲む」「盗人が棲む」のようなⅡAに特徴的な現在形の文末形式も見られる。しかし、7文目の「何故かと云ふと」から14文目の「なつてしまつたのである」までは人がいない理由を複数の文に分割して述べたものであるから、これらは「なぜなら～のである」の文に包摂される内容であると考えⅡBとした。ただし、7文目から14文目までは、主筋とは独立した「小さな物語」が語られていると考えることもできる。その中で、これらの表現はⅠやⅡAの機能を果たしていると考えることもできよう。これらを受けて、15文目の「その代り又鴉がどこからか、たくさん集つて来た。」というⅠの文をきっかけに主筋的内容が始まり、初めて物語の場面が動き出すのである。

〈2〉Ⅱの観察

ⅡAは、「羅生門」で次の四例が見出される。いずれも、ある場面の瞬間的な動きを表すものである。

○雨は、羅生門をつゝんで、遠くから、ざあつと云ふ音をあつめて来る。

○風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。

○老婆は、それでも下人をつきのけて行かうとする。

○下人は又、それを行かすまいとして、押しもどす。

これらは、物語の現場に視点を置いて、現場の事物や人物の一瞬の動きを捉えて目の前的に描くものである。第一例は「そこで、下人は、何を措いても差当り明日の暮しをどうにかしようとして――云はゞどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考へをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いてゐたのである。」に続く内容で、雨音を下人の視

点（聴覚）と共感して捉えた表現であると解される。第二例は、「夕冷えのする京都は、もう火桶（ひおけ）が欲しいほどの寒さである。」の後に続き、門の下に視点を置いて現場の様子を描き出している風である。第三例と第四例は、作品のクライマックス部分での使用例で、「老婆」と「下人」の二人の動作を現場から臨場的に描いている趣がある。いずれも現場の迫真的描写という説明が当てはまる例であろう。

次に、ⅡBに用いられる動詞を挙げておくが、その動詞の意味に一定の傾向は見られない。ⅡBでは、文末形式「ている」「のである」等によって付け加えられる「状態」「解説」などの意味が重要な意味内容である。

いる（2）、影響する（1）、追い出される（1）、起こる（1）、括る（1）、来る（1）、ころがる（1）、支える（1）、知る（1）、衰微する（1）、棲む（2）、黙る（2）、出る（1）、出来る（1）、飛びまわる（1）、とまる（1）、なってしまう（1）、ぬらす（1）、待つ（1）、わかる（1）

この中から、ⅡBで多かった「ている」と「ていた」に上接する動詞に分けて挙げる。

○「ている」＝とまる（1）、ぬらす（1）、わかる（1）、支える（1）、飛びまわる（1）、黙る（2）、

○「ていた」＝追い出される（1）、括る（1）、ころがる（1）、衰微する（1）、黙る（1）、待つ（1）

瞬間動詞「とまる」「わかる」「追い出される」は「ている」「ていた」を伴い、結果の状態が存続することを表している。これ以外のものは継続動詞であり、「ている」「ていた」を伴い進行中の継続的な動作を表していると解される。Ⅰのような瞬間的に完了する意味を持つ動詞が「た」を伴ったときは、時間・場面を展開させる機能を持つのに対し、これらは「ている」を付属させることによって物語の時間の展開を止めて状況を静止的に描き出したものであると言えよう。

ⅡBは「黙る」の場合に見られるように、過去形と現在形の選択も自由であって、また、「ている」「である」「ない」とするか、「ていた」「であった」「なかった」とするかも、筆者の文体的選択に関連する。

〈3〉Ⅲの観察

ⅢCとⅢDに用いられた動詞を挙げておく。

ⅢC「視覚・聴覚」＝窺う（1）、眺める（2）、眼に付く（1）、見える（3）、見まわす（1）、見る（2）、見守る（1）、耳へ伝わって来る（1）、動

かしている（1）、覗いて見る（1）、覗きこむ（1）、聞く（3）

ⅢD「感情・思考」＝意識する（1）、（憎悪が）動いて来る（1）、驚く（1）、感じる（1）、（恐怖が）消えて行く（1）、心の中へはいって来る（1）、（憎悪の心を）冷ます（1）、失望する（1）、知る（1）、知れる（1）、（反感が）増して来た（1）、（悪を憎む心が）燃え上がり出す（1）、勇気が生まれて来る（1）、わかる（2）、忘れる（3）

野村真木夫（二〇〇〇）は、「描出話法」として「発話・思考」「感情・感覚」「視覚・聴覚」の三類を指摘している。本稿では視点論の立場から「た」を伴う「発話」の文はⅠに含め、「思考」はⅢD「感情・感覚」に含めて、描出話法をⅢC・ⅢDに二分類できると考えた。永尾章曹が、主人公に偏って用いられる「心情語彙」を取り出す事ができるというのもⅢDの語群を指すものであると考えられる。次に「羅生門」のクライマックス部分で連続的に用いた例を挙げておく。

（Ⅰ）すると、老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めてゐた死骸の首に両手をかけると、丁度、

猿の親が猿の子の虱（しらみ）をとるやうに、その長い髪の毛を一本づゝ抜きはじめた。

（ⅢD）髪は手に従つて抜けるらしい。

（ⅢD）その髪の毛が、一本づゝ抜けるのに従つて、下人の心からは、恐怖が少しづゝ消えて行つた。

（ⅢD）さうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しづゝ動いて来た。

（ⅢD）――いや、この老婆に対すると云つては、語弊（ごへい）があるかも知れない。

（ⅢD）寧（むしろ）、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。

（ⅢD）この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へてゐた、饑死をするか盗人になるかと云ふ問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、饑死を選んだ事であらう。

（ⅢD）それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床（ゆか）に挿した松の木片のように、勢いよく燃え上り出してゐたのである。

（ⅢD）下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつた。

（ⅢD）従つて、合理的には、それを善悪の何れに片づけてよいか知らなかつた。

（ⅢD）しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云ふ事が、それ丈で既に許す可らざる悪であつた。

（ⅢD）勿論、下人は、さつきまで自分が、盗人になる気でゐた事なぞは、とうに忘れてゐるのである。

（Ⅰ）そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上つた。

（Ⅰ）さうして聖柄（ひじりづか）の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。

Ⅰの間に挟まれた連続一一文がⅢDの文であり、下人の心情の盛り上がりに焦点を当てた箇所であると言える。

四・三　作品毎の観察

最後に、表1～表4に示した各作品の文末形式の傾向を比較することによって、作品毎に特徴的な面を述べておく。

まず、各作品に共通してみられる点を述べると、いずれの作品においても、Ⅰの「た」とⅡBの「である・であった」「ている・ていた」「ない・なかった」が中心であると言えるであろう。すなわち、物語の叙述は、Ⅰによる展開とⅡBによる状態の記述や、背景の解説を基軸としていると言えるであろう。

次に、ⅡA・ⅡB・ⅢC・ⅢDにおける過去形と現在形の分布について見ると、作品によって顕著な差異が見られた。すなわち、「羅生門」と「杜子春」では過去形と現在形が半ばして使われているが、「六の宮の姫君」と「秋」とでは、ほとんど過去形で統一されているという点である。作品の骨組みはどの作品でも過去形で叙述するが、展開部では、現在形を導入するかどうかが現代小説の文体的選択の問題としてあるようである。

まず、ⅡAの「る」（動詞現在形）による「歴史的現在」の用法は、「羅生門」と「杜子春」にのみ見られ、特に「羅生門」ではクライマックス部分での使用が見られることが分かった。[3]「歴史的現在」は、「状態」や「解説」の部分で現在形を導入する傾向のある作品において現れやすいといえよう。しかし、「歴史的現在」の叙述は使用量から言えば決して多いとは言えない点で、古典作品（特に『今昔物語集』のような漢文の影響を色濃く受けた説話など）の場合と違いがある。[4]

また、ⅡBの状態・解説の用法は、「羅生門」では現在形「である」の形で特徴的に使用されるが、「た」を基調とする「六の宮の姫君」「秋」では過去形「であった」の形式が多い。また、「羅生

門」では過去形「ていた」6例、現在形「ている」7例で拮抗しているが、「六の宮の姫君」と「秋」とでは現在形「ている」はなく、過去形「ていた」「なかった」が極めて例数が多い。また、過去形「なかった」1例に対し現在形「ない」が7例見られる「羅生門」に対して、「六の宮の姫君」「秋」では「なかった」のみを極めて多く用いる。このように「羅生門」では、「であった」「ていた」「なかった」より「である」「ている」「ない」を多く用いる傾向があり、これは同様に現在形の叙述の多い「杜子春」でも共通して見られる傾向である。このように、「ている」「である」「ない」を多く用いる作品と「ていた」「であった」「なかった」を多く用いる作品に区分できる。そして、「ている」「である」「ない」を採る作品は、同時に、ⅡAを用いる作品に対応している。「歴史的現在」は、このように現在形を多く導入した物語作品において、現在形の用法の一部分として導入されるのであって、決して現在形の主用法ではないことは今回の調査からも明らかである。

ⅢC・ⅢD・Ⅳは、作品間で使用量の差が大きい。現在形を多く導入する点で共通する「羅生門」と「杜子春」とで比較すると、ⅢC・ⅢDが多くⅣが少ない「羅生門」と、ⅢC・ⅢDが少なくⅣの多い「杜子春」というように、全く傾向が逆になる。また、ともに過去形を基本とする「六の宮の姫君」と「秋」では、「六の宮の姫君」ではⅢD・Ⅳが多くⅢCが少ないのに対して、「秋」では使用量の差が特に顕著には表れない。このような傾向の中で、特に「杜子春」のⅢDの少なさは目を引くが、これは、ⅢDの多い「羅生門」「六の宮の姫君」「秋」などはⅢDの地の文で主人公の内面を描き出すのに対して、ⅢDの少ない「杜子春」では会話文に人物の心情が語られることが多いためであると思われる。「杜子春」の最終段では、次のように人物の心情を吐露する会話文の連続が見られる。

（ⅡB）その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり佇んでゐるのでした。

（ⅡB）霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、――すべてがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。

（Ⅳ）「どうだな。おれの弟子になつた所が、とても仙人にはなれはすまい。」

（Ⅰ）片目眇の老人は微笑を含みながら言ひました。

（Ⅳ）「なれません。なれませんが、しかし私はなれなかつたことも、反つて嬉しい気がするのです。」

（Ⅰ）杜子春はまだ眼に涙を浮べた儘、思はず老人の手を握りました。

（Ⅳ）「いくら仙人になれた所が、私はあの地獄の森羅殿の前に、

鞭を受けてゐる父母を見ては、黙つてゐる訳には行きません。」

（Ⅳ）「もしお前が黙つてゐたら――」と鉄冠子は急に厳な顔になつて、ぢつと杜子春を見つめました。

（Ⅳ）「もしお前が黙つてゐたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐたのだ。――お前はもう仙人になりたいといふ望も持つてゐまい。大金持になることは、元より愛想がつきた筈だ。ではお前はこれから後、何になつたら好いと思ふな。」

（Ⅳ）「何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです。」

（ⅡB）杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子が罩（こも）つてゐました。

（Ⅳ）「その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り、二度とお前には遇はないから。」

（Ⅰ）鉄冠子はかう言ふ内に、もう歩き出してゐましたが、急に又足を止めて、杜子春の方を振り返ると、「おお、幸、今思ひ出したが、おれは泰山の南の麓に一軒の家を持つてゐる。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まふが好い。今頃は丁度家のまはりに、桃の花が一面に咲いてゐるだらう。」と、さも愉快さうにつけ加へました。

「杜子春」の例では、このように、会話によって、ⅢCの内容を補う面があると思われる。思うに、人物の心情を描くことは多くの小説類でなされることであろうが、その描き方は次のように、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳのいずれにおいてもなし得るであろう。

（Ⅰ）太郎は泣き出した。

（ⅡA）太郎は泣き出す。

（ⅡB）太郎は泣き出していた。

（ⅢD）太郎は泣き出したい気持ちだった。

（Ⅳ）（太郎は）「泣き出したい気持ちだ」（と言った。）

個々の作品によって、ⅢやⅣを採る意図は異なるはずである。更に多くの作品によって、ⅢC・ⅢD・Ⅳの作り出す表現構造を明らかにしていかなければならない。

五　まとめ

以上述べ来たったところをまとめると、次の三点に集約できる。

①Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにおける特徴的な文末形式として、Ⅰは「た」、ⅡAは「る」（動詞現在形）、ⅡBは「ている・てある」「である・のである」「ない・でない」が挙げられる。このⅡBの三形式は、ⅢCやⅢDにも添って、「状態」を描写したり、内容

を「解説」したりする意味を添える文末形式である。この場合、ⅡBとⅢC・ⅢDが複合的に用いられていることになる。

②動詞の面から見ると、Ⅰは人物の発言、移動、働きかけなどを意味するもの、ⅢCやⅢDは「視覚・聴覚」「感覚・思考」を意味する動詞の語句によって特徴づけられる。これらに「た」やⅡBの性質を添える「ている」「である」「ない」などの文末形式を伴うこともある。

③芥川のいずれの作品でも、話の筋を支えるⅠ「た」と、話の内容を詳述するⅡB「ている」「である」「ない」による表現を基本的要素として指摘できる。過去形の選択を基本とする作品ではこれが、「ていた」「であった」「なかった」の形式で対応するというだけで、叙述の基本がⅠとⅡBであることは動かない。しかし、ⅡBあるいはⅢC・ⅢDにおいて過去形・現在形いずれを選択するかは、作品によって左右される文体的要素であると考えられる。すなわち、過去形・現在形のいずれを選択するか、あるいはⅡA・ⅢC・ⅢD・Ⅳのいずれを選択するかによって作品ごと特徴が見られる。

ここでは、芥川の四作品を元に表現内容と文末形式の性質を検討したが、今後さらに多くの作品によって筆者の分類の有効性を検証することができれば、他の様々な文章についても文章表現の特質を詳細に明らかにする方法として利用できるであろう。そのためには、一文の持つ表現内容を形式的な特徴も含めてさらに細かく検討しておくことが必要である。例えば、本稿でも少し触れたように会話文の引用形式には様々なものが見られるが、会話を引用する形式を細かく分類すれば、表現内容や形式上の特徴として作品を特徴づける側面が浮かび上がるであろう。また、このような表現内容と文末形式の分類をもとにして、物語の冒頭・展開・結末に至る叙述の流れを捉えることも課題である。すなわち、ある作品の文章構成を、一文ごとの表現内容の連鎖として捉えるならば、ある作品は、どのような表現内容がどのような順序で叙述されるのかといったことが新しい検討課題として浮かび上がってくる。今後、個々の文末形式の意味を詳細に記述すること、文章を構成する要素としてこれらの表現内容がどのように機能しているかを検討していきたいと思う。

注

① 拙稿「物語文の表現と視点」（玉村文郎編『日本語学と言語学』明治書院　平成14年1月）、および拙著『今昔物語集の表現形成』（和泉書院　平成15年10年）

② 『芥川龍之介全集』（岩波書店　平成7年）による。

③ 四・二の〈1〉でクライマックス部分の「歴史的現在」の例を示しておいた。なお、「杜子春」の1例は「するとどこからやつて来たか、突

然彼の前へ足を止めた、片目眇（すがめ）の老人があります。」のように人物視点に寄り添ったものと思われる例である。

④ 拙稿「今昔物語集の『けり』叙述―『今は昔』と文章構成―」『仏教文学』第25号　平成13年3月）、および拙著『今昔物語集の表現形成』（和泉書院　平成15年10年）

参考文献

① 池上嘉彦（一九八六）「日本語の語りのテクストにおける時制の転換について」（『記号学研究』6　昭和61年11月）

② 工藤真由美（一九九五）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間表現―』（ひつじ書房　平成7年11月）

③ 曽我松男（一九八四）「日本語の談話における時制と相について」（『言語』13-4　昭和59年4月）

④ 永尾章曹（一九九三）「文章と語彙―表現語彙論のための一つの試み―」（『継承と展開2　近代語の成立と展開』和泉書院　平成5年11月）

⑤ 野村真木夫（二〇〇〇）『日本語のテクスト―関係・効果・様相―』（ひつじ書房　平成12年11月）

⑥ 藤井俊博（二〇〇二）「物語文の表現と視点」（玉村文郎編『日本語学と言語学』明治書院　平成14年1月）

⑦ 牧野成一（一九八三）「物語の文章における時制の転換」（『言語』12-12　昭和58年12月）